

今ここで頑張っています

研究支援の現場から……出会いを大切に

理化学研究所基幹研究所 先端技術基盤部門 連携支援チーム
中尾愛子(新制32回卒)



応用化学科に入学してから30年以上がたち、その間、様々な時に「人」、「研究」、「装置」などとの出会いがあった。今振り返ると、いろいろな分岐点で、それが社会人としての方向決めの指針になったように思える。

1984年土田研究室を修士で卒業、企業に就職したが、男女雇用均等法が施行される前年であり、まだまだ、女性が思いっきり活躍する機会は得られなかった。しかし、企業にいた6年間においてX線光電子分光(XPS)と出会い、それによって今の私があると言っても過言ではない。

1990年、企業での日々に限界を感じていた頃、日本化学会誌の公募欄の「X線光電子分光の経験者」という内容が目にとまり、思いきって公募に応じ、理化学研究所の研究支援部門である表面解析室(当時)に採用された。私を採用してくれた今は亡き坂入室長は、二人のお嬢さんがいたこともあり、女性が活躍してほしいという大きな希望があったと、後になって教えてくれた。坂入室長との出会いもまた、今日の私には欠かせない出来事である。

採用された当時は、XPSや走査型電子顕微鏡などの装置だけがあり、使える研究者だけが使う体制であったが、依頼分析の開始や講習会の実施、保守契約を結んでの装置の管理体制の強化など、支援体制を整えていった。入所から2年後長女が生まれたが、7か月で復帰、育児休暇取得第一号としての重責を自分自身に課した。その娘も現在高校3年生である。

支援部門であったが、研究の自由もあったので、10年以内に学位をとる事を目標とした。そこでも、新しい手法との出会いがあった。「イオン注入法」という表面改質手法である。最初は、金属へのイオン注入という、まったく未知の世界から始まり、だんだんと、自分が研究室で学んだ高分子材料へのイオン注入にシフトし

ていった。子育てをしながら研究を積み上げていき、2000年高分子研究室の先輩である東京大学マテリアル工学科石原一彦教授のもとで学位を取得した。大学の研究室での研究内容とは全く違う内容であったが、研究室の3年間において、先生方や先輩達が厳しく指導をしていただいたおかげで、研究のアプローチの仕方が身についていき、目標を実現できたと思っている。

自分で一つの研究をまとめ上げると、研究支援を行う上でも非常にその経験が役に立つ。単に研究者から依頼される分析から、「研究者が何を知りたいかという観点から試料を解析する」という対応に変わった。こちらから、「そのためには、こういう試料の分析も必要ですから、準備をお願いします」と助言することも多く、高度支援への対応が可能となった。

昨年4月より、連携支援チームのチームヘッドとなり、XPSを用いた研究支援に加えて、全理研の基盤部門の連携を見据えた支援全般の基幹研の窓口、また、先端技術基盤部門として、全理研への支援を供給する窓口としての役割を担っていく「連携支援」のミッションが加わった。会社における技術営業とマーケティングをミックスしたような内容であり、研究者の方々にとっては新しい種類の「支援」なので、壁もあり誤解もあり、苦労の日々であるが、サポートしてくれる仲間がいる。それは、数年前の所内の会議における出会いにおいて構築した信頼関係の賜物であったりする。また、何よりの人脈は、応用化学の先輩、友人、後輩であることは言うまでもないが、振興調整費のプロジェクトで出会った産官学の方々やいろいろな場での出会いが人脈となり、私の能力以上の企画や連携が可能となっている。

これから定年までの10年間、出会いを大切にしながら、連携支援という新しいミッションを確立すべく頑張っていこうと思う。